

『たすけ』の気まぐれコラム（第九回）

こんにちは『たすけ』です。今回は室内環境のお話の二回目です。

燃焼暖房機器は強力な暖房機器ですが、断熱性能が悪い住宅だからこそ必要な機器とも言えます。住宅の断熱性能や気密性能をアップすることで、寒冷地以外ではエアコン暖房などの非燃焼機器で対応することが可能になります。

実は**暖房熱の4割以上が開口部(サッシなど)から逃げていきます**。したがって、**開口部の断熱性能を倍にするだけで暖房費が2割以上カットできる**わけです。言い方を変えると、2割以上少ないエネルギー機器で暖房が可能だということです。

開口部の断熱リフォームで**費用対効果No1が『内窓』の設置**です。施工時間が短く、施工店以外の工事(付帯工事と言います)が不必要な為、余計な費用が発生しません。断熱性能が倍になりますが、気密性能がアップしますので、実際はそれ以上の断熱性能が得られます。

この気密性能アップがミソで、冷氣侵入を抑えるため床部が冷えにくく、**室内の上下温度差を少なくすることで、無駄な暖房が防げる**というおまけ付です。



気密性能がアップするといいい事づくめかと思えばそういうわけでもありません。自然換気量が減りますので**換気不足・室内空気環境汚染を引き起こす可能性がある**のです。室内燃焼暖房機器の使用は止めても、調理機器がガスレンジのままだとその危険性が残ります。

調理中は換気扇の稼働を必ず行なうことが重要ですが、**IHクッキングヒーターに切り替える**ことが最適な対策です。これで有害ガス対策はできるのですが、水蒸気だけが対応できません。

『生活発生水』といって、人間が生活する上で必ず水蒸気は発生するので、**発生量が室外放出量を超えると湿度上昇**してしまいます。これが**結露発生を促す**のです。

内窓を設置して暖かくなったにも関わらず、結露が減らない、むしろ増えたという場合は、上記の状況を疑ってみて下さい。

さて、この場合の対策ですが、**『余分に発生したものは速やかに排出する』**ということが重要になります。いわゆる『換気』なのですが、通常の排気ファンではせつかくの冷暖房熱も排気してしまい非効率です。

お薦めは『熱交換式換気扇』と言われるもので、同時吸排換気システムなのですが、吸気と排気が熱を交換しながら換気できるものです。冬場の場合、排気は冷えながら吸気は温まりながら入れ替わります。簡単に言うと排気管と吸気管が背中合わせになっていて換気経路上で熱交換するものです。熱は温度計で測れる『顕熱(けんねつ)』と水分が保持する『潜熱(せんねつ)』があり、合わせて**全熱**と呼びますが、この**潜熱を交換しないと高い交換率を維持できません**

設置する場合は、必ず**『全熱交換式換気扇』**を選択しましょう。

さらに湿度センサーが付属したものがあり、設定湿度を超えると自動的に稼働し、下回ると自動停止する優れものがあります。

10万円未満で購入できますので、高湿度状態と判断した場合は**『湿度センサー付全熱交換式換気扇』**を設置しましょう。

次回は花粉症を含めた外環境対策についてのお話です。

お楽しみに。

